

中国六朝古小説訳注『列異伝』(四)

先 坊 幸 子

要 旨

『列異伝』訳注は、六朝古小説研究のための基礎資料収集とその読解を目的とし、現在続けている「中国六朝古小説訳注」作成の一部である。魏・文帝『列異伝』は、六朝期に於ける志怪小説集の一つである。しかし現在では既に失われ、類書等に引用されている説話を残すのみで、それらの説話は『列異伝』として魯迅『古小説鈎沈』にまとめられている。『隋書』経籍志・雜伝に「列異伝三卷魏文帝撰」とあるが、『旧唐書』経籍志・雜伝類および『新唐書』芸文志・小説家類は張華の撰とする。この度は『古小説鈎沈』を参考に、全四十七条の内「22 鄧(とう)卓(たく)」から「28 營陵道人」までの七条を取り上げ、類書所引『列異伝』を用いて字句の校勘をした上で訳注を施した。

キーワード

列異伝・志怪・中国古小説訳注

『列異伝』訳注は、六朝古小説研究のための基礎資料収集とその読解を目的とし、現在続けている「中国六朝古小説訳注」作成の一部である。

この度は『古小説鈎沈』を参考に、全四十七条の内「22 鄧卓」から「28 營陵道人」までの七条を取り上げ、類書所引『列異伝』を用いて字句の校勘をした上で訳注を施した。「01 陳倉祠」から「07 欒侯」までは『安田女子大学紀要』第40号(平成二十四年二月)に、「08 鮮于冀」から「16 蒋子文」までは『安田女子大学紀要』第41号(平成二十五年二月)に、「17 胡母班」から「21 劉卓」までは『安田女子大学紀要』第42号(平成二十六年二月)に掲載済。

22 鄧卓

呉時、長沙鄧卓^①為神。遣馬^②迎之。見物在下、紛紛如雪。卓問持馬者、曰「此海上白鶴飛也。」一人便取鶴子数枚与卓。

呉の時、長沙の鄧卓^{とうたく}神と為る。馬を遣はして之を迎ふ。物の下に在るを見るに、紛紛として雪の如し。卓馬を持する者に問ふに、

曰く「此れ海上に白鶴の飛ぶなり」と。一人便ち鶴子数枚を取りて卓に与ふ。

【通釈】

呉の時、長沙の鄧卓は神になった。馬を遣わして彼を迎えた。下の方に何か見えたが、舞い散る雪のようだった。卓が馬を引く者に尋ねると、言うには「あれは白い鶴が海の上を飛んでいるのです」と。迎えに来た一人が、直ぐに鶴の子を何羽か捕まえて卓に与えた。

【語釈】

*この話は敦煌石室所出唐人写本類書殘卷に見える。

①長沙―郡名。秦に置かれた。今の湖南省東部の地。

②迎―この字、底本は「邛」字に作り、「疑当作迎」（疑ふらくは當に迎に作るべし）と注している。

23 湯蕤

大司馬河内湯蕤、字聖卿。少時病瘡、逃神社中。有人呼杜邱杜邱。聖卿応声曰「諾」。起至戸口、人曰「取此書去。」得素書一卷。乃譴効百鬼法也。所効輒効。

大司馬河内の湯蕤、字は聖卿。少時瘡を病み、神社の中に逃ぐ。人有りて杜邱杜邱と呼ぶ。聖卿声に應じて曰く「諾」と。起ちて戸口に至るに、人曰く「此の書を取りて去れ」と。素書一卷を得たり。乃ち百鬼を譴効するの法なり。効する所輒ち効あり。

【通釈】

大司馬であつた河内の湯蕤は、字を聖卿といった。若い時に熱病を病み、神社の中に逃げ込んだ。何者かが杜邱杜邱と呼んだ。聖卿はその声に「はい」と返事をした。立ち上がった戸口に行くと、何者かが「この書を取って去れ」と言った。一卷の絹の巻物を手に入れた。それは何と妖怪を退治する方法であつた。退治する度に効果があらわれた。

【語釈】

*この話は『北堂書鈔』八七、『太平御覽』五三二および七四三に見える。

①大司馬河内―「大司馬」は、三公の一。周代、三公（太師・太傅・太保）は天子を補佐し、正しい政道を行つて陰陽を調和させることを職とした。秦に廢され、漢には大司馬・大司徒・大司空を置いて三公とし、別に太師・太傅・太保を三公の上に位したが、存廢は不定であつた。後漢には太傅のみを置き、三国に太傅・太保を置く。晋、太宰・太傅・太保を置き、宋・齊・梁・陳もこれに拠つた。「河内」は、郡名。漢に置かれた。河南省河北道。この五字、『太平御覽』七四三に無し。

②湯蕤―「湯」字、『太平御覽』五三二は「陵」に、七四三は「陽」に作る。

③少時病瘡、逃神社中―この八字、『北堂書鈔』は「少時病瘡、過社中」（少時瘡を病み、社中に過る）七字に、『太平御覽』七四三は「逃瘡神祠」（瘡を神祠に逃ぐ）四字に作る。「瘡」は、熱病。

④杜邱杜邱―この四字、『北堂書鈔』および『太平御覽』五三二

「杜郎杜郎」、七四三は「杜郎杜郎」に作る。

⑤ 謹効―「謹」は、せめる、とがめる。「効」は、罪を調べ追及する。

⑥ 百鬼―沢山の妖怪。『太平御覧』七四三は「百神」に作る。

⑦ 所効輒効―この四字『北堂書鈔』に無く、『太平御覧』七四三は「乃差」(乃ち差ゆ)二字に作る。

24 何文

魏郡張奮者、家巨富。後暴衰、遂宅与黎陽程家。程入居、死病相繼、転売与鄴人何文。文日莫、乃持刀上北堂中、梁上坐。至二更、忽見一人、長丈余、高冠黄衣、升堂呼問「細腰、舍中何以有生人氣也。」答曰「無之。」須臾、有一高冠青衣者、次之、又有高冠白衣者、問答並如前。及将曙、文乃下堂中、如向法呼之。問曰「黄衣者誰也。」曰「金也。在堂西壁下。」「青衣者誰也。」曰「錢也。在堂前井辺五步。」「白衣者誰也。」曰「銀也。在牆東北角柱下。」「汝誰也。」曰「我杵也。在竈下。」及曉、文按次掘之、得金銀各五百斤、錢千余万。仍取杵焚之、宅遂清安。

魏郡の張奮なる者、家は巨富なり。後に暴に衰へ、遂に宅を売りとて黎陽の程家に与ふ。程の入りて居するや、死病相ひ繼げば、転じ売りとて鄴の人の何文に与ふ。文日暮るるに、乃ち刀を持ちて北堂中に上り、梁上に坐す。二更に至り、忽ち一人を見るに、長は丈余、高冠黄衣にして、堂に升りて呼びて問ふ「細腰、舍中に何を以て生人の氣有るや」と。答へて曰く「之無し」と。須臾にして、

一の高冠青衣なる者有り、之に次いで、又た高冠白衣なる者有り、問答すること並びに前の如し。将に曙ならんとするに及び、文乃ち堂中に下り、向の法の如くして之を呼ぶ。問ひて曰く「黄衣の者は誰なるか」と。曰く「金なり。堂の西壁の下に在り」と。「青衣の者は誰なるか」と。曰く「錢なり。堂前の井の辺り五歩に在り」と。「白衣の者は誰なるか」と。曰く「銀なり。牆の東北の角の柱下に在り」と。「汝は誰なるか」と。曰く「我は杵なり。竈の下に在り」と。曉に及び、文次を按じて之を掘るに、金銀各の五百斤、錢千余万を得たり。仍りて杵を取りて之を焚くに、宅遂に清安なり。

【通釈】

魏郡の張奮は、もともと巨万の富を所有していた。後に急に没落して、とうとう家を黎陽の程家に売り渡した。程が入居すると、家の者が相次いで死んだり病に罹ったりしたので、鄴の人の何文に転売した。文は日が暮れると、刀を持って北の座敷に上り、梁の上に座った。二更になり、突然何者かが現れたが、身の丈は一丈あまり、立派な冠をつけて黄色の衣をまとい、座敷に上がって呼び掛けて尋ねた「細腰よ、家の中で生きた人間の氣配がするのは何故だ」と。答えるには「誰もおりません」と。暫くして、立派な冠をつけて青い衣をまとった者が現れ、これに続いて、また立派な冠をつけて白い衣をまとった者が現れ、いずれも先程と同じ問答をした。夜が明けようとする時、文は座敷に下りて、先程のやり方にならって細腰を呼んだ。尋ねて言うには「黄色の衣の者は誰だ」と。言うには「金です。座敷の西の壁の下におります」と。「青い衣の者は誰

だ」と。言うには「錢です。座敷の前の井戸の辺りから五歩の所におります」と。「白い衣の者は誰だ」と。言うには「銀です。土壁の東北の角にある柱の下におります」と。「お前は誰だ」と。言うには「私は杵です。竈の下におります」と。夜が明けて、文は次々にこれらを掘り起こし、金と銀それぞれ五百斤、錢は千万あまりを見つけた。それから杵を持ってきて焼くと、家ではそのまま何事も起こらなくなった。

【語釈】

*この話は『太平広記』四〇〇および『太平御覽』七六二に見える。また、この事は『搜神記』一八〔芸文類聚〕六四、『初学記』二四、『太平御覽』四七二、八一、『事類賦注』九引に見える。

魏郡張奮者、家本巨富、忽衰老財散、遂宅与程応。応入居、举家病疾、転壳隣人何文。文先独持大刀、暮入北堂中梁上。至三更竟、忽有一人、長丈余、高冠黄衣、升堂呼曰「細腰」。細腰応喏。曰「舍中何以有生人氣也。」答曰「無之。」便去。須臾、有一高冠青衣者。次之、又有高冠白衣者。問答並如前。及将曙、文乃下堂中、如向法呼之、問曰「黄衣者為誰。」曰「金也。在堂西壁下。」「青衣者為誰。」曰「錢也。在堂前井辺五歩。」「白衣者為誰。」曰「銀也。在牆東北角柱下。」「汝復為誰。」曰「我、杵也。今在竈下。」及曉、文按次掘之、得金銀五百斤、錢千万貫。仍取杵焚之。由此大富、宅遂清寧。（『搜神記』一八）

魏郡の張奮なる者、家本は巨富なるも、忽ち衰老して財散じ、遂に宅を売って程應に与ふ。應の入りて居するや、家を挙げて疾を病めば、転じて隣人の何文に売る。文先づ独り大刀を持し、暮れに北堂中の梁上に入る。三更の竟りに至り、忽ち一人有り、長は丈余、高冠黄衣にして、堂に升りて呼びて曰く「細腰」と。細腰、応喏す。曰く「舍中に何を以て生人の氣有るや」と。答へて曰く「之無し」

と。便ち去る。須臾にして、一の高冠青衣なる者有り。之に次いで、又た高冠白衣なる者有り。問答すること並びに前の如し。将に曙ならんとするに及び、文乃ち堂中に入り、向の法の如くして之を呼び、問ひて曰く「黄衣の者は誰と為す」と。曰く「金なり。堂の西壁の下に在り」と。「青衣の者は誰と為す」と。曰く「錢なり。堂前の井の辺り五歩に在り」と。「白衣の者は誰と為す」と。曰く「銀なり。牆の東北の角の柱下に在り」と。「汝は復た誰と為す」と。曰く「我は、杵なり。今竈の下に在り」と。曉に及び、文次を按じて之を掘るに、金銀五百斤、錢千万貫を得たり。仍りて杵を取りて之を焚く。此れに由りて大いに富み、宅遂に清寧なり。

①魏郡—河南省臨漳、漳、漳の西南。『太平広記』にこの二字なし。

②張奮—「奮」字、『太平御覽』七六二は「舊（旧）」に作る。

③黎陽—県名。漢に置かれた。河南省滑縣の東北。

④程家—「家」字、『太平御覽』七六二および『搜神記』は「応」に作る。

⑤鄴人—「鄴」は、県名。漢に置かれた。河南省臨漳縣の西。この二字、『太平御覽』七六二は「荆民」（荆の民）に作る。『搜神記』は「隣人」に作る。

⑥二更—今の午後十時前後。亥の刻。乙夜。「更」は、一夜を五つに分けた時間の単位。『搜神記』は「三更」に作る。「三更」は、今の午前零時前後。子の刻。『太平広記』及び『搜神記』は「更」字の後に「竟」字あり。

⑦高冠—高く立派な冠。

⑧黄衣—「芸文類聚」、『初学記』、『太平御覽』四七二及び八一、『事類賦』に引く『搜神記』は「赤幘」に作る。

⑨ 升堂—この二字、『太平御覧』七六二は「来堂前」(堂前に来りて)三字に作る。

⑩ 答曰、無之—この四字、『太平御覧』七六二に無し。

⑪ 須臾、有一高冠青衣者—これ以下二つの問答は、『芸文類聚』、『初学記』、『太平御覧』四七二及び八一、「事類賦」に引く『捜神記』に無い。

⑫ 井辺—「辺」字、『太平御覧』七六二は「西」字に作る。

⑬ 牆—『太平御覧』七六二は「堂」字に作る。

⑭ 斤—重量の単位。当時の一斤は二二二・七三グラム。

25 宗定伯

① 南陽宗定伯、年少時、夜行逢鬼。問曰「誰。」鬼曰「鬼也。」鬼曰「卿復誰。」定伯欺之言「我亦鬼也。」鬼問「欲至何所。」答曰「欲至宛市。」鬼言「我亦欲至宛市。」共行数里。鬼言「步行大亟。可共迭相担也。」定伯曰「大善。」鬼便先担定伯数里。鬼言「卿太重。将非鬼也。」定伯言「我新死。故重耳。」定伯因復担鬼、鬼略无重。如其再三。定伯復言「我新死、不知鬼悉何所畏忌。」鬼曰「唯不喜人唾。」於是共道遇水、定伯因命鬼先渡。聽之了无声。定伯自渡、漕漕作声。鬼復言「何以作声。」定伯曰「新死不習渡水耳。勿怪。」行欲至宛市、定伯便担鬼至頭上、急持之、鬼大呼。声咋咋、索下不復聽之。徑至宛市中、著地化為一羊。便売之、恐其便化、乃唾之、得錢千五百乃去。於時言「定伯売鬼、得錢千五百。」

南陽の宗定伯、年少の時、夜に行きて鬼に逢ふ。問ひて曰く「誰なるか」と。鬼曰く「鬼なり」と。鬼曰く「卿復た誰なるか」と。定伯之を欺きて言ふ「我も亦た鬼なり」と。鬼問ふ「何れの所にか至らんと欲する」と。答へて曰く「宛市に至らんと欲す」と。鬼言ふ「我も亦た宛市に至らんと欲す」と。共に行くこと数里、鬼言ふ「步行大いに亟まれり。共に迭ひに相ひ担ふ可きなり」と。定伯曰く「大いに善し」と。鬼便ち先づ定伯を担ふこと数里。鬼言ふ「卿大いに重し。将た鬼に非ずや」と。定伯言ふ「我は新たに死するなり。故に重きのみ」と。定伯因りて復た鬼を担ふに、鬼略ぼ重さ無し。其くの如きこと再三なり。定伯復た言ふ「我は新たに死すれば、鬼悉く何の畏忌する所あるかを知らず」と。鬼曰く「唯だ人の唾を喜ばざるのみ」と。是に於て道を共にして水に遇ふに、定伯因りて鬼に命じて先に渡らしむ。之を聴くに了として声無し。定伯自ら渡るに、漕漕として声を作す。鬼復た言ふ「何を以て声を作すや」と。定伯曰く「新たに死して水を渡るに習れざるのみ。怪しむこと勿れ」と。行きて宛市に至らんと欲るに、定伯便ち鬼を担ひて頭上に至し、急ぎ之を持するに、鬼大いに呼ぶ。声咋咋として、下ろすを索むるも復た之を聴かず。徑ちに宛市中に至り、地に著くるに化して一羊と為る。便ち之を売るに、其の便ち化するを恐れ、乃ち之に唾し、錢千五百を得て乃ち去る。時に於て言ふ「定伯鬼を売り、錢千五百を得たり」と。

【通釈】

南陽(河南省)の宗定伯は、若い頃、夜道を歩いていて幽霊に出くわした。尋ねて言うには「何者だ」と。幽霊は「幽霊です」と答

えた。幽霊が「あなたこそ何者ですか」と尋ねた。定伯は幽霊を騙して「私も幽霊です」と言った。幽霊は「何処へ行こうとしているのですか」と尋ねた。「宛の町に行くつもりです」と答えた。幽霊が言うには「私も宛の町に行こうとしているのです」と。連れ立って数里ほど行った。幽霊が「歩いて行くのはとても疲れます。互いに代わる代わる背負って行く」と良いと思います」と言った。定伯は「実に良いですね」と応じた。幽霊は直ぐに先ず定伯を背負って数里歩いた。幽霊は「あなたはとても重いですね。まさか幽霊ではないのでは」と言った。定伯は「私は死んだばかりなのです。だから重いだけです」と答えた。それで今度は定伯が幽霊を背負ったのだが、幽霊は殆ど重さを感じなかった。この様なことを再三くりかえした。また定伯は「私は死んだばかりなので、幽霊が何を恐れるのかを全く知らないのです」と言った。幽霊が言うには「人間の唾だけは嫌いです」ということだった。こうして一緒に行く内に川に行き当たったので、定伯は幽霊に先に渡らせた。その様子を聞いていたが全く水音がしなかった。定伯が渡ると、ざぶざぶと水音がした。幽霊はまた「どうして水の音がするのですか」と言った。定伯は「死んだばかりで川を渡るのに慣れていないだけです。怪しむことはありません」と言った。歩いて行って宛の町に着こうとする時、定伯はいきなり幽霊を頭の上に担ぎ上げ、急いでこれを捕まえると、幽霊はひどく騒いだ。その声は大きく、下ろしてほしいと頼むのだが、聞き入れることはしなかった。真つ直ぐに宛の町に入り、地面に下ろすと一匹の羊に化した。早速これ売り飛ばしたが、それが直ぐに化けることのないよう、唾を吐き掛け、錢千五百

を儲けて立ち去った。その時の人々は「定伯は幽霊を売って、千五百の錢を儲けた」と言った。

【語釈】

*この話は『太平御覽』八八四および三八七、『法苑珠林』一〇、『太平広記』三二一に見える。また、この事は『搜神記』一六（『芸文類聚』九四、『太平御覽』八二八、九〇二引）に見える。

南陽宋定伯、年少時、夜行逢鬼。問之、鬼言「我是鬼。」鬼問「汝復誰。」定伯誑之言「我亦鬼。」鬼問「欲至何所。」答曰「欲至宛市。」鬼言「我亦欲至宛市。」遂行数里、鬼言「步行太遲。可共遞相担。何如。」定伯曰「大善。」鬼便先担定伯数里。鬼言「卿太重。将非鬼也。」定伯言「我新鬼。故身重耳。」定伯因復担鬼、鬼略無重。如是再三。定伯復言「我新鬼、不知有何所畏忌。」鬼答言「惟不喜人唾。」於是共行、道遇水。定伯令鬼先渡。聽之了然無声音。定伯自渡、漕漕作声。鬼復言「何以有声音。」定伯曰「新死不習渡水故耳。勿怪吾也。」行欲至宛市、定伯便担鬼著肩上、急執之、鬼大呼。声咋咋然、索下不復聽之。徑至宛市中、下著地、化為一羊。便売之、恐其變化、唾之、得錢千五百乃去。當時石崇有言「定伯売鬼、得錢千五。」（『搜神記』一六）

南陽の宋定伯、年少の時、夜に行きて鬼に逢ふ。これに問ふに、鬼言ふ「我は是れ鬼なり」と。鬼問ふ「汝復た誰なるか」と。定伯之を誑きて言ふ「我も亦た鬼なり」と。鬼問ふ「何れの所にか至らんと欲する」と。答へて曰く「宛市に至らんと欲す」と。鬼言ふ「我も亦た宛市に至らんと欲す」と。遂に行くこと数里、鬼言ふ「步行太だ遅し。共に遞ひに相ひ担ふ可し。何如」と。定伯曰く「大いに善し」と。鬼便ち先づ定伯を担ふこと数里。鬼言ふ「卿太だ重し。將た鬼に非ずや」と。定伯言ふ「我は新鬼なり。故に身重き耳」と。定伯因りて復た鬼を担ふに、鬼略ぼ重さ無し。是くの如きこと再三なり。定伯復た言ふ「我は新鬼なれば、何の畏忌する所有るか

を知らず」と。鬼答へて言ふ「惟だ人の唾を喜ばざるのみ」と。是に於て共に行き、道に水に遇ふ。定伯鬼をして先に渡らしむ。之を聴くに了然として声音無し。定伯自ら渡るに、漕濯として声を作す。鬼復た言ふ「何を以て声有るや」と。定伯曰く「新たに死して水を渡るに習れざるが故なる耳。吾を怪しむこと勿れ」と。行きて宛市に至らんと欲るに、定伯便ち鬼を担ひて肩上に著け、急ぎ之を執ふるに、鬼大いに呼ぶ。声昨昨然として、下ろすを索むるも復た之を聴かず。径ちに宛市中に至り、下ろして地に著くるに、化して一羊と為る。便ち之を売るに、其の變化するを恐れ、之に唾し、錢千五百を得て乃ち去る。当時石崇に言有り「定伯鬼を売り、錢千五百を得たり」と。

①南陽—今の河南省。

②宗定伯—「宗」字、『法苑珠林』、『太平広記』、『搜神記』は「宋」に作る。

③問曰、誰。鬼曰、鬼也。鬼曰、卿復誰—この十二字、『法苑珠林』は「問曰、誰。鬼尋復問之、卿復誰」（問ひて曰く、誰なるかと。鬼尋いで復た之に問ふ、卿復た誰なるかと）十一字に、『太平広記』また『搜神記』は「問之、鬼言、我是鬼。鬼問、汝復誰」（之に問ふに、鬼言ふ、我は是れ鬼なりと。鬼問ふ、汝復た誰なるかと）十二字に作る。『太平御覧』三八七にはこの十二字から「如其再三」までの記述が無い。

④鬼問、欲至何所。答曰—この八字、『太平御覧』八八四に無し。

⑤宛—今の河南省南陽県。

⑥大亟—この二字、『太平御覧』は「太極」（ただ極まれり）に、『法苑珠林』、『太平広記』、『搜神記』は「太遲」（ただ遅し）に作る。

⑦可共迭相担也—『太平広記』及び『搜神記』は、この句の後に「何如」二字あり。

⑧曰、大善—この三字、『太平御覧』八八四は「乃大喜」（乃ち大いに喜ぶ）に作る。

⑨將非鬼也—この四字、『太平御覧』八八四に無く、『太平広記』は「不是鬼也」（是れ鬼ならずや）に作る。

⑩新死—「死」字、『太平広記』及び『搜神記』は「鬼」に作る。

⑪定伯復言、我新死、不知鬼悉何所畏忌—この十五字、『太平御覧』三八七は「問鬼所忌」（鬼の忌む所を問ふ）四字に作り、『太平広記』は「定伯復言、我新鬼、不知有何所惡忌」（定伯復た言ふ、我は新鬼なれば、何の惡忌する所有るかを知らず）十四字に、『搜神記』は「定伯復言、我新鬼、不知有何所畏忌」（定伯復た言ふ、我は新鬼なれば、何の畏忌する所有るかを知らず）十四字に作る。

⑫於是共道遇水—行欲至宛市—この五十字、『太平御覧』三八七に無し。

⑬漕濯—ざぶざぶという水音。この二字、『太平御覧』八八四は「濯濯」に作る。

⑭至頭上—この三字、『太平御覧』三八七および『法苑珠林』は「着頭上」（頭上に着く）に、『太平広記』、『搜神記』は「著肩上」（肩上に著く）に作る。また、『太平御覧』八二八引『搜神記』は「着酒瓮上」（酒瓮の上に着く）四字に作る。

⑮急持之—この三字、『太平御覧』三八七は「急持行之」（急ぎ之を持し行く）四字に、『太平広記』及び『搜神記』は「急執之」（急

ぎ之を執ふ）に作る。

①鬼大呼、声咋咋、索下不復聽之―この十二字、『太平御覽』三八七に無し。「咋咋」は、声の大きいさま。『法苑珠林』、『太平広記』、『搜神記』は、この二字の後に「然」字をおく。

②乃唾之―この三字、『太平御覽』三八七および『太平広記』、『搜神記』は「唾之」（之に唾す）二字に、『法苑珠林』は「為並唾之」（為に並びに之に唾す）四字に作る。

③得錢千五百―「千五百」三字、『太平御覽』三八七は「五千」二字に作り、以降の記述なし。また、『太平御覽』九〇二はこの下に「買者繫之。明視之但繩在」（買ふ者之を繫ぐ。明に之を視れば但だ繩在るのみ）の十字、『雲文類聚』は「買者將還繫之。明旦見繩在」（買ふ者將き還りて之を繫ぐ。明旦繩在るを見るのみ）の十一字がある。

④於時言―この三字、『太平御覽』八八四は「于時名」（時に于て名あり）に、『法苑珠林』は「于時石崇言」（時に于て石崇言ふ）に、『太平広記』は「當時有言」（當時言有り）に、『搜神記』は「當時石崇有言」（當時石崇に言有り）に作る。

26 傳尚書小女（傳尚書の小女）

①北地傳尚書小女、嘗拆荻作鼠、以狡獪放地。鼠忽能行、徑入戸限土中。又拆荻更作、呪之云「汝若為家怪者、当更行。不者不動。」放地、便復行如前。即掘限内覓、入地數尺、了無所見。後諸女相繼喪亡。

北地の傳尚書の小女、嘗て荻を拆きて鼠を作り、もつて狡獪して地に放つ。鼠忽ち能く行き、徑ちに戸限より土中に入る。又た荻を拆きて更に作り、之に呪して云ふ「汝若し家の怪を為すならば、当に更に行くべし。不者動かざれ」と。地に放つに、便ち復た行くこと前の如し。即ち限の内を掘りて覓むるに、地に入ること数尺、了として見る所無し。後に諸ろの女相ひ繼ぎて喪亡す。

【通釈】

北地郡の傳尚書の小さい方の娘が、あるとき荻を裂いて鼠を作り、遊んでいて地面に放った。鼠は直ぐに動きだし、真つ直ぐに戸の敷居から土の中に入つて行つた。また荻を裂いて更に作り、この鼠に祈つて言うには「お前がもし家に怪異をおこすのなら、またさつきと同じように行きなさい。そうでなければ動いてはだめ」と。地面に放つと、また直ぐ先程のように土の中へと入つて行つた。直ぐに敷居の内側を掘つて搜したが、地中を数尺ほど掘り進んでも、見つかる気配はまったく無かつた。後に娘たちは相次いで亡くなつた。

【語釈】

*この話は『太平広記』三六〇に見える。

①北地―郡名。三国・魏に置かれた。今の陝西省耀県の東南。

②尚書―官名。秦代に置かれた。初めは天子の文書の授受を掌る小官だったが、次第に地位が上がり、唐・明代には六部の長官となつた。

③狡獪―遊び戯れる。また、悪賢い。狡獪。

④戸限―戸のしきみ（戸闕）。門や戸口などの下に敷く横木。現在

の敷居。「限」字について、『太平広記』三六〇は「限原作眼、抛明鈔本改」(限原は眼に作るも、明鈔本に抛りて改む)と注している。

27 安楽人彭(安楽の人彭)

昔^①番陽郡安楽^②有人。姓彭、世以捕射為業。兒随父入山。父忽^③然倒地、乃變成白鹿。兒悲号追、鹿超然遠逝、遂失所在。兒於是^④不捉弓終身。至孫復学射。忽得一白鹿、乃於鹿角間得道家七星符、并有其祖姓名年月分明。視之^⑤悔。乃燒去^⑥弧矢。

昔^①番陽郡安楽^②に人有^③。姓は彭、世捕射を以て業と為す。兒父に随ひて山に入る。父忽^④蹶然として地に倒れ、乃ち變じて白鹿と成る。兒悲号して追ふも、鹿超然として遠く逝き、遂に所在を失ふ。兒是に於て弓を捉らずして身を終ふ。孫に至りて復た射を学ぶ。忽ち一白鹿を得るに、乃ち鹿角の間に於て道家の七星符を得、並びに其の祖の姓名・年月の分明なる有^⑤。之を視て悔し、乃ち弧矢を燒去す。

【通釈】

むかし番陽郡安楽^②に或る男がいた。姓を彭^③といい、代々射獵を生業としていた。息子は父親に随つて山に登った。父親は急にぱたりと地に倒れ、なんと白い鹿に変わってしまった。息子は悲しみ叫んで追い掛けたが、鹿は聞こえていないかのように遠くへ立ち去り、そのままどこへ行ったか分からなくなった。それから息子は弓を取ることもなく亡くなった。孫の代になって再び弓術を学んだ。不

意に一頭の白い鹿を捕まえたが、なんと鹿の角の間に道家の七星符を見つけ、それには祖父の姓名・年月がはっきりと記されていた。これを視て嘆き悔やみ、そうして弓と矢を燒き捨ててしまった。

【語釈】

*この話は『太平御覽』八八八に見える。また、この事は『異苑』八(『初学記』二九、『太平御覽』九〇六、『太平広記』四四三引)に見える。

晋咸寧中、鄱陽樂安有人。姓彭、世以射獵為業。每入山、与子俱行。後忽蹶然而倒、化成白鹿。見悲号、鹿跳躍遠去、遂失所在。其子終身不復弋獵。至孫復習其事。後忽射一白鹿、乃於兩角間得道家七星符、并有其祖姓名及鄉居年月在焉。觀之悔。乃燒弓矢、

永斷射獵。(『異苑』八)

晋の咸寧中、鄱陽樂安^②に人有^③。姓は彭、世射獵を以て業と為す。山に入る毎に、子と俱に行^④。後に忽^⑤蹶然として倒れ、化して白鹿と成る。見て悲号するも、鹿跳躍して遠く去き、遂に所在を失ふ。其の子身を終ふるまで復た弋獵せず。孫に至りて復た其の事を習ふ。後に忽ち一白鹿を射るに、乃ち兩角の間に於て道家の七星符を得、並びに其の祖の姓名及び郷居・年月の有る在^⑥。之を觀て悔懊す。乃ち弓矢を燒き、永く射獵を斷つ。

①昔―『搜神記』は「晋咸寧中」四字に作る。「咸寧」は、西晋初代皇帝、司馬炎の年号。二七五―二八〇年。

②番陽郡樂安―「番陽郡(鄱陽郡)」は、県名。三国呉、孫権の時に置かれた。今の江西省波陽県。鄱陽湖の東南。(鄱陽郡、呉置。統県八、戸六千一百。広晋、鄱陽、樂安、余汗、鄱陽、歴陵、葛陽、晋興。『晋書』地理志)「樂安」二字、『古小説鈎沈』及び『太平御覽』八八八は「安楽」に作るが、『異苑』に拠つて

改めた。「安楽県」は漢に置かれた。今の河北省通県の西北。『漢書』地理志に「漁陽郡、県十二、安楽」とある。

③蹶然——驚いて飛び立つさま。奮い立つさま。

④不提弓終身——この五字、『太平御覽』は「終身不提弓」（身を終ふるまで弓を提らず）に作る。『搜神記』は「終身不復弋獵」（身を終ふるまで復た弋獵せず）六字に作る。

⑤道家七星符——道教を奉ずる道士の使うおふだ。

⑥乃焼去弧矢——「矢」字、『古小説鈎沈』は「失」に作るが、『太平御覽』八八八に拠った。『搜神記』は「乃焼弓矢、永断射獵」（乃ち弓矢を焼き、永く射獵を断つ）八字に作る。

28 營陵道人（營陵の道人）

①北海營陵有道人、能使人与死人相見。同郡人婦、死已数年。聞而往見之。曰「願令我一見死人、不恨。」②遂教其見之。於是与婦人相見、言語悲喜、恩情如生。良久、時乃聞鼓声悵悵。不能出戸、掩門乃走。其裾為戸所閉、掣絶而去。後歲余、此人死。家葬之、開見婦棺、蓋下有衣裾。

北海の營陵に道人有り、能く人をして死する人と相ひ見は使む。同郡の人の婦、死して已に数年。聞きて往きて之に見ふ。曰く「願はくは我をして一たび死人に見は令むれば、恨みず」と。遂に其の之に見ふを教ふ。是に於て婦人と相ひ見ふ。言語悲喜し、恩情生くるが如し。良や久しくして、時に乃ち鼓声の悵悵たるを聞く。戸より出づる能はず、門を掩ちて乃ち走る。其の裾戸の閉づる所と為

れば、掣絶して去る。後歲余にして、此の人死す。家之を葬り、開きて婦の棺を見るに、蓋下に衣裾有り。

【通釈】

北海の營陵に道士がいて、生者と死者とを会わせることができた。同じ郡の人の妻が、亡くなってから已に数年が経った。その話を聞いて道士に会いに行つた。言うには「どうか私を一度だけ死んだ妻に会わせて下されば、思い残すことはありません」と。そうして会う為の方法を教えた。それで亡くなった妻に会うことができた。語り合つて悲しみ喜び、その愛情は生きていた時と変わらなかった。暫く経つたところ、太鼓の音が恨めしげに響いた。扉から出ることが出来ないでいたが、門を閉めて走つた。衣服の裾が扉の間に挟まつてしまつたので、引きちぎつて去つたのだつた。それから数年後、この人が亡くなった。家族が彼を葬ろうとして、墓を開いて妻の棺を見ると、蓋の下に衣服の裾が挟まつていた。

【語釈】

*この話は『文選』江文通雜体詩注および『太平御覽』八八四に見える。また、この事は『搜神記』卷二（『法苑珠林』一一六、『太平御覽』五五一、『太平広記』二八四引）に見える。

漢北海營陵有道人、能令人与已死人相見。其同郷人婦、死已数年。聞而往見之。曰「願令我一見亡婦、死不恨矣。」道人曰「卿可往見之。若聞鼓声、即出勿留。」乃語其相見之術、俄而得見之。於是与婦言語悲喜、恩情如生。良久、聞鼓声悵悵、不能得住。当出戸時、忽掩其衣裾戸間、掣絶而去。至後歲余、此人身亡。家葬之、開冢見婦棺、蓋下有衣裾。（『搜神記』卷二）
漢の北海の營陵に道人有り、能く人をして已に死する人と相ひ見は

令む。其の同郷の人の婦、死して已に数年。聞きて往きて之に見ふ。曰く「願はくは我をして一たび亡婦に見はしむれば、死すとも恨みず」と。道人曰く「卿往きて之に見ふ可し。若し鼓声を聞けば、即ち出でて留まること勿れ」と。乃ち其の相ひ見ふの術を語るに、俄にして之に見ふを得たり。是に於て婦と言語悲喜し、恩情生くるが如し。良や久しくして、鼓声の恨恨たるを聞き、住まるを得る能はず。戸を出づる時に当たり、忽ち其の衣裾を戸の間に掩めば、掣絶して去る。後歳余に至り、此の人身亡す。家之を葬り、冢を開きて婦の棺を見るに、蓋下に衣裾有り。

① 北海宮陵―山東省昌樂県の東南。『漢書』卷二八上・地理志に「北海郡、県二十六、宮陵」とある。『搜神記』はこの上に「漢」字がある。

② 不恨―『太平御覧』八八四は「亦不恨」（亦た恨みず）三字に、『搜神記』は「死不恨矣」（死すとも恨みず）四字に作る。

③ 遂教其見之―この五字、『搜神記』は「道人曰、卿可往見之。若聞鼓声、即出勿留。乃語其相見之術、俄而得見之」（道人曰く、卿往きて之に見ふ可し。若し鼓声を聞けば、即ち出でて留まること勿れと。乃ち其の相ひ見ふの術を語るに、俄にして之に見ふを得たり）二十八字に作る。

④ 良久時―『文選』及び『搜神記』は「良久」（良や久しくして）二字に、『太平御覧』八八四は「時良久」（時に良や久しくして）三字に作る。

⑤ 恨恨―かなしみいたむさま。『搜神記』は「恨恨」に作る。『太平御覧』八八四にこの二字なし。

⑥ 不能出戸―蓋下有衣裾―この三十六字、『太平御覧』八八四は

「遂別而去」（遂に別れて去る）四字に作る。また、「不能出戸」から「其裾為戸所閉」までの十四字、『搜神記』は「不能得住、当出戸時、忽掩其衣裾戸間」（住まるを得る能はず、戸を出づる時に当たり、忽ち其の衣裾を戸の間に掩む）十五字に作る。

〔二〇一四・九・二五 受理〕